

# 子どもの本

研究会



【私の一冊】『子どもに語るアイルランドの昔話』

渡辺洋子・茨木啓子 編訳 (こぐま社)

小国 貴子

昨年五月末、アイルランドを旅する機会を得た。僅か十一日間、友人たちとレンタカーで、国を反時計回りに一周する旅。旧石器時代の巨石墳墓群・ケルト時代の遺跡・初期キリスト教時代の修道院跡などを中心に、やや盛り沢山であわただしい日程ではあった。旅の道しるべとして読んだ渡辺洋子氏の『アイルランド 自然・歴史・物語の旅』の冒頭、「大英帝国がいかにアイルランド人を搾取しようとしても奪い取ることができなかったものが二つある。それはこの国の美しい自然と、アイルランド人の突き抜けたような想像力だった。」とある。この言葉を胸に、憧れの国を旅し、この小さくも美しい国に、まだまだ沢山の不思議が残っていることを実感することができた。 ささやかな旅のお土産として、自分の為にくつかおはなしを覚えたいと思った中、一度読むと心から離れないおはなしが、「天使の歌声」だった。美しい小鳥の歌声を追って森に入って行つた。若いお坊様が、帰ってみると千年の時を経ていた……という物語。浦島太郎伝説のようなお話だが、その中で鍵となる「千年」という年月も、神様の目から見れば、ほんの一日に過ぎない。」という言葉の意味とは。これについて友人から、聖書の箇所「愛する人たちは、このことだけは忘れないでほしい。主の下では、一日は千年の様で、千年は一年の様です。」とあると教わった。ふと、大好きな画家、香月泰男の座右の銘「一瞬一生」という言葉が浮かんだ。これも、ここからきているのだろうか。それは、大きな意味での自然界。その中で生きる私たちの一生は本当に短いが、その一瞬一瞬が貴重なのだとも受け止められる。また、一瞬の感動、一瞬の出会いが、一人一人の人生の中でどれ程大切な時であるか。それは、ところ変われども、誰しも共通して持つ感覚ではないだろうか。悠久の時を超えて伝えられたおはなしは、簡単にはその深さを知ることができない。だが、一つの国を巡り、一つのおはなしに思いをはせること。そこから広がる時間と空間の不思議さに、思いは尽きない。

☆『アイルランド 自然・歴史・物語の旅』渡辺洋子著 (三弥井書店)

(特定非営利活動法人 熊本子どもの本の研究会 会員)

